

援助・調査プロジェクトと住民の環境問題 ーヒマラヤ高地住民の環境認識研究ノートー

古川 彰
中京大学社会学部

環境問題は誰の問題か。これまでの環境問題は問題の加害者と被害者が誰であるのかは比較的はつきりしていた。しかし、ここしばらくの間に環境問題の焦点になりつつある地球環境問題では世界中の誰もが被害者であり、かつ加害者であるという構図が描かれてきた。だが地球上のすべての地域に均質的にその論点を当てはめることは妥当ではない。地球規模の環境問題は地球規模の濃淡をもって加害者と被害者を分布させていると言わなければならない。環境問題があらたな南北問題を引き起こしているともいえるだろう。なぜなら、環境問題の原因のおおくが意図するかしらないかは別として、やはり工業化の過程とその工業化を推進してきた近代化イデオロギーに求められるべきものであるからである。そのような明瞭な工業化、近代化イデオロギーがもたらした環境問題ではなくとも、すぐれて善意で行なわれてきた援助のプロジェクトでさえ、意図せざる結果としての生活破壊を引き起こしかねない。本稿ではこれまで2回にわたって見てきたヒマラヤ高地シェルパ族の村、ナムチェバザールの30年間にわたった援助プロジェクトがもたらした生活の変化を記述し、そこに起こっている問題を上に述べたような観点から検討することにした。

1 はじめに

1680年にオランダで作成されたとされるモンタヌスの日本誌銅版画のなかの海津大崎奇観は海津の風景をよく知るわたしにとっても、また海津を知らない他の日本人の誰にとっても、おそらく奇妙なものではない。椰子のように見える植生も舟の形も、船上の人々の衣装や小物、さらには大崎そのものの姿からして、〈これは日本ではない〉としか言いようのない何ものかなのだ。試しに幾人かの友人にその銅版画をみせてみたところ、中国の景色だろうとか、オランダかどこかではないかとか、少なくともそれを日本ではないかと言いつつ当てた人はいなかった。

それではわたしたちの想像する、例えばヒマラヤの自然はどのようなものか。私たちはさまざまなメディアをとおしてヒマラヤの情報を得ているからほとんど本当のヒマラヤを想像できると考えていいはしないだろうか。確かにモンタヌスの銅版画が描かれた時代と比べれば比較にならないほど

の情報に満ちており、その情報の確かさも増してきている。だが、実は問題は情報の量や質だけではなく、その構成力にあるのだ。写真や文からいかにそれを構成して現実の風景を想像できるかが問題なのだ。

単に風景を想像し楽しむだけならば、それが少々現実と異なっているだけでも問題ではない。わたしたちの風景観というものは、実はそんな悠長なことにだけかかわっているのではなく、そのまま環境問題にかかわっているとしたら、さまざまな情報から構成される現実のイメージの誤解は深刻な問題を引き起こす可能性をはらんでいるといわなければならない。

つまりわたしたちが〈これは環境問題だ〉というとき、おそらくわたしたちは理想的な環境と現実にある環境との差異、もしくはその変化を問題にしている。健康の被害であっても、景観破壊であっても同様だ。それでは理想の環境とはなにか。通常わたしたちは、かつてあった健康、かつてあ

った美しい風景を理想的とはいわないまでもよりよき環境として、今をはかる。それは生活者としてのわたしたちの当然の思考過程だ。

しかしそれぞれの生活者自身のなかにあるくかつてあった美しい風景はどのように形成されたのか。またそれはどのようにして回りの人々に共有されてきたのか。さらにそれはどの範囲まで共有されてきた風景なのか。ひとつの風景は決してすべての人に共有されているわけではない。もしそれを無視して他者に強要すれば、いつもあらたな問題を引き起こすことになるだろう。なぜなら風景はく見られるためにだけあるのではなく、そこで暮らしてきた人々の生活の営みがつくりだしてきたく生きられた風景でもあるのだ。

本稿ではこれまで2回にわたって見てきたヒマラヤ高地シェルパ族の村、ナムチェバザールの30年間におこなわれた援助プロジェクトがもたらした生活の変化を記述し、そこに起こっている問題を先に述べた観点から検討することにした。

2 ナムチェ村の観光化のはじまり

エベレスト街道と呼ばれるトレッキングコースの最も重要なポイントであるクンプ地方のナムチェ村はヒマラヤ山腹の標高およそ3400メートルあたりに位置する。カトマンズの空港から小型飛行機に乗ってルクラまでがおおよそ1時間、そこからおおくのトレッカーは一泊二日かけてナムチェにやってくる。そこがトレッキングの終点である人も、そこからさらにトレッキングをつづける人も、ナムチェで幾日かを過ごすことが多い。だからナムチェのおおくの家がロッジを経営している。

ナムチェ村がこのように変貌したのは1970年代のトレッキングブームがはじまってからの約15年ほどのことである。それまでもヒマラヤ登山の黄金時代の50年代から60年代ははじめにかけて、ヒマラヤ登山家には登山の優秀なサポーターとして「シェルパ」という名と共に知られていたし、くシェルパのふるさとナムチェは一般にもすこしづつ知られるところとなっていた。くシェルパく

と言うのは荷物を運ぶ人のことだという誤解はこのころ定着したものであろう。いずれにせよ70年代にナムチェはそれまでの農耕、移牧と出稼ぎ

の村から、観光の基地へとおおきく変貌する。

ちょうどトレッキングがブームになりはじめる70年代のはじめに、はやくもエベレスト初登頂者で、その後シェルパの人々に献身的な援助をつづけていたヒラリー卿は、このままではクンプ一帯の森林景観が破壊されてしまうことを懸念し、その辺りを国立公園にするための計画をすすめている。70年代のはじめにすでにこの辺りでは過剰な森林伐採がおこなわれていたのである。ネパールへの旅行者の数は1960年が約4000人程度であったが70年には約4万6000人、77年に10万人を、86年には20万人を越えている。そのうちトレッキングや登山を目的とするものは70年代の10パーセントから80年代には20パーセントへと増加し、86年の一年間だけでも3万3000人強の多数にのぼっている。

このような観光化の大波がナムチェの景観や人々の暮らしをおおきく変化させていったことは当然であろう。だがその変化を支えていたのは観光化だけではない。ヒラリー卿をはじめとする各国のおおくのボランティアや援助プロジェクトがこの地域にはいり、シェルパの人々の生活改善に献身的な努力をおこなってきた。その努力の成果もまたこの村をおおきく変化させてきた。

1) 観光化のはじまり

ナムチェの環境におおきな変化をおよぼしたと考えられる出来事を概ね年代順にみていこう（ナムチェ村環境史年表）。

チベット人たちがヒマラヤを越えて南面のヒマラヤ山腹に村をつくりはじめるのは16世紀頃だと推定されている。その後18世紀も半ばを過ぎてから、もしくは19世紀の初頭になってはじめてナムチェ村が形成される。19世紀の初頭にはダーズリンなどのヒル・ステーションと呼ばれる保養地がインド・ヒマラヤ山地地方に形成され、そこへの出稼ぎがシェルパ族のおおきな現金収入源となっていた。そこで彼らはヒル・ステーションに通じる道路の建設、食糧の運搬などに従事するほか、イギリス人官僚や軍人たちの狩猟、学術調査などのガイドやポーターとなり、イギリス風のスタイルを身につけていった[鹿野；1982]。そして1921年にイギリス隊がはじめてエベレスト

表1 ナムチェ村環境史年表
プロジェクトなど

1920s		英国エベレスト登山隊でのシェルパ
1950s		ヒラリーとテンジン・エベレスト登頂 ヒマラヤ初登頂時代 チベット動乱で大勢のチベット人が流入
1960s	クムジュンに学校 ルクラに空港 クンデに病院 水場プロジェクト（放置）	ヒマラヤ登山禁止
1970s	バザール制度化 シャンボチュに空港 エベレストビューホテル ニュージーランド調査 ナショナルパーク指定	ヒマラヤトレッキング観光化 エベレスト街道のパッティ（茶屋）増加 ガイド・ポーター・ロッジ カトマンズなどへの流出
1980s	水力発電プロジェクト（点灯） 立入禁止区域の設定開始	ODA援助拡大
1990s	京都大学医学術調査開始 ナワ制度復活 水道化プロジェクト（各家への給水） 電化プロジェクト（24時間配電）	パンチャヤット制度廃止

その他、軍隊、警察、銀行、郵便局、ヘルスポストなどもできた。

遠征隊のためにダーズリンで雇ったシェルパをともない、その後かれらの登山での優秀さが認められることになった。さらに1953年、ヒラリー卿とともにエベレストに初登頂したシェルパ族のテンジン・ノルゲイがその名を不動のものにしていった。

この時代までナムチェ村はその他の村と共に優秀な、登山のハイ・ポーターやガイドを輩出する村ではあっても、ナムチェ自身が登山の基地や観光地として有名であったわけではない。しかも50年代がヒマラヤ登山の黄金期であったとしても、ごく少数の卓越した登山家がそこを通過するだけで、彼ら相手のロッジや商店が成り立つという状況ではけっしてなかったのである。とはいえこうした登山家たちの村への訪れは新たな変化のはじまりであった。66年から69年にかけての登山禁止の時期を除けば、その後一貫して登山者

は増え続け、生活の変化という観点から見ても観光化がナムチェの最もおおきな流れとなったのである。

2) チベット難民の流入

1959年にはチベット動乱が勃発し、おおくのチベット人難民がナムチェにも流入した。ナムチェにはそれほど多くの耕地や家畜のための牧草地があるわけでもなく、それまでの人口からすればかなり多量の難民を受け入れ、その生活を維持していかなければならなかったのであるから、このチベット難民の流入もまたナムチェの環境をおおきく変化させずにはいなかっただろう。そのころ流入してきたチベット難民の定着もすすみ30年過ぎた現在ではナムチェ住民と婚姻関係を結ぶものも出はじめている。シェルパ社会はシェルパ・早くから移り住んだチベット人・チベット難民とい

う階層性は見受けられるとしても、もともとエスニシティの壁が比較的緩やかで開放的な社会と言われてきた。だがナムチェ近辺の村でこれほどおおくのチベット難民が定着して暮らしている村は見あたらず、ナムチェがこの頃すでに他村とは異なった、ある意味で都市的な性格を帯びていたことをうかがわせる。この都市的性格がその後のナムチェの歴史、とりわけここで論じる環境の歴史におおきな影響を与えてきたことも見のがせない。

3) 定期市の開始

そしてさらにその都市的性格を強めたものが、定期市の成立であった。鹿野によればナムチェに現在のような形での定期市が成立するのは1962年のことである〔鹿野；1982〕。週に一度開かれるバザールにはクンプを中心にさらに広範な地域から人が集まる。商品を数日かけて売りに来る人、それらを買うためにまた一日かけてやって来る人がナムチェの村の南東の一番下の大きな石のある市「場」に集まってくる。ナムチェの外から集まってくる人数は売り手、買い手あわせて、多いときには800人にも達し、ナムチェから下る道も登る道も、荷を持った人やゾッキョ（ヤクと牛の一代雑種）でごった返している。このごった返しにさらに輪をかけて観光客が買物にやってくる。ここでは商品を通じてさまざまな情報が行き交うことになる。こうしてナムチェはクンプ高地地方における都市的な意味合いをますます強めていった。こうしたナムチェの経済的な変化はその住民の環境観を変化させずにはおかなかっただろう。まずは生業の変化によるもの、そして次には生活を取りまくモノの変化によるものである。

3 ナムチェに導入されたプロジェクト

1) ヒラリー・スクール

クンプで最初の学校がナムチェのすぐ上の村クムジュンに、ヒラリー卿によってつくられたのは1961年のことである。1963年にはパンボチェとターメに小学校ができ、そして1964年にソルのズンベシとチャウリカルカとともにナムチェに小学校が発足する。クムジュンの学校はその後、10年生、つまりネパールの学校制度の中等教育の最終

学年まで拡張されて、現在は寄宿舎に近辺の小学校を卒業した生徒たちを住まわせて中等教育をおこなっている〔Fisher；1990〕。ナムチェの子供たちは小学生はナムチェの小学校に、それを卒業したものはクムジュンスクールに通っている。ナムチェからは急勾配の尾根を登り、クムジュンとの境の鞍部をこえて2、30分で学校に行くことができるので寄宿するものはいない。ここ数年ナムチェではこの学校を出てからカトマンズやインドの大学に進むものも現れている。

また、この学校教育ではネパール語とともに英語が教えられており、ここで養われた英語の力はトレッキングや登山のガイドやハイ・ポーターとして働くときにおおいに役立つことになる。私たちがナムチェを訪れるといつも通訳してくれる青年たちの幾人かも、カトマンズやインドの大学を出て村に戻ってきてガイドなどをして生計を立てていた。大学を出てもカトマンズに職があるわけでもなく、かといってナムチェでも雨期の間はトレッカーがさほど訪れることもないので、仕事にあふれているといった状態が続いている。高等教育を受けるということの現実的な意味と価値観との間に今のところおおきなギャップがあるようである。それはなにもナムチェだけのことでなく、ネパール全体がそのような状況にあるが、とりわけナムチェではそのあたりの矛盾がはっきりみえるのである。

わたしは最近、その青年の一人から日本にきて働きたいが、働き口を紹介してもらえないだろうかという手紙を受け取った。その手紙は短いが、彼の気持ちのよく伝わるものであった。日本で働いて、最近子供を生んだ妻とともに暮らすための家をつくりたい、というのが彼の希望である。カトマンズや日本で長く暮らしたいから村をでて働きたいと言うのではなく、村で家を建てて「人並み」の暮らしをするにはどうしてもまとまった金が必要になっている事情がよく読み取れる。たしかに自分の受けた教育と現状の職業とのギャップは認識しながらも、村の暮らしを簡単に捨ててしまわないという青年がナムチェには増えている。今後それがどのような事態をもたらすのかはわからないが、高等教育を終えた青年たちが村のなかで発言力をまし、いくつかのエイジ・グループを

組織しながら村の変化をリードしている様子はいたとところで出会う光景であった。それらのこととちょっとした出稼ぎとがいまのところ矛盾なく同居しているようにみえる。だがそれが非常に微妙なバランスの上に立っていることも、わたしたち日本人のこの30年ほどの経験に照らしてみればあきらかなことだろう。

2) カトマンズ空港、ルクラ空港、シャンボチェ空港

ナムチェから歩いて半日ないしは一日ばかりのルクラに空港が建設されたのは1964年のことである。もともとその空港は「建築用の資材の輸送を助けるために」造られたものであったが、「予期に反した結果」をもたらしたとヒラリー卿は言う。「そこはエベレスト地区へさらに容易に近付くための通路となり、そしてトレッカーや、観光客の数が増加し燃料の需要が加速される」という結果をもたらすことになった [E.Hillary;1984]。おそらく空港の余波はそれだけではなかった。ルクラからナムチェにいたる道もしだいに整備され、エベレスト街道と呼ばれるようになる。街道にはパッティ(茶店)がいくつもでき、ナムチェにはロッジがつくられるようになっていったのもこの頃からである。

とはいえ60年代は観光といっても登山客がその中心であったが、ネパール政府による登山禁止の期間を経て70年代にはいり、現在につながる本格的な観光化の時期を迎える。72年ナムチェのすぐ近くのエベレストが見える丘に日本人の宮原氏によってエヴェレストビューホテルがつくられた。その後1990年に再開されるまでホテルは半ば放棄されることになるが、そのアプローチとして、シャンボチェ空港が造られたのはナムチェの観光化の象徴的な出来事であったといつてよいだろう。

シャンボチェ空港はルクラと異なり定期航空便があるわけではないが、少数でも72年という時期に観光客がエベレストを見ることができ3500メートルまで、カトマンズから歩かずに行くことができるという意味で「行く側の観光化」の始まりであった。また同時にナムチェの住民にしてみれば汗を流しながら山の姿でナムチェに歩いてたどり着く登山客ではなく、カトマンズから一時間ば

かりで直接やってくる観光客を迎え入れる「迎える側の観光化」の最初の経験でもあった。

ヒラリー卿はその後の展開を次のように述べている。「1970年という年代は、クンプにおいてはたいへんな拡張の時代になった。いまや一年間に5000人の外国人がエベレスト地方に訪れ、そしてその外国人ひとりあたり三人のネパール人がその地方の外部から雇い入れられたと見積もられている。毎年二万人の人がクンプに流入したことになる—その地方の人口3000人に対して、多大な負担となったのである。いくつもの小さなホテルが建てられた。茶店やビヤ・ショップが数多くできた。ナムチェの毎週のバザールは訪問者や彼等のポーターに食糧や燃料を提供するために、数百人のネパール商人が群がった。薪や建築用材の需要が増加したために森林は損害を受けた」と。

3) ナショナル・パーク—ヒラリー卿の思い出から—

そしてこの事態を開閉するために、クンプ一帯はナショナルパークに指定されることになるのである。この間の事情については前号で詳しく説明したので [古川;1991]、ここではふたたびナショナルパーク設立に深く関わったヒラリー卿の語るところを長くなるがそのまま引用しておこう [E.Hillary;1984]。

—1973年10月に、国連の顧問とカトマンズの林業について語り合った。彼は既にエベレスト国立公園の可能性について、ネパールの小国立公園当局の理事と話し合っていた。外部からの援助が必要と感じられた。ニュージーランドはネパールと同様な地勢を持った国であった。そしてよく発達した国立公園のシステムを持っていたニュージーランドは既に設立されているサガルマタ (Sagarmatha エベレスト) 国立公園に参加して援助してくれる積もりがあるだろうか、と彼らは私に尋ねた。わたしはそれについてはわからなかった。わたしはニュージーランドの外務大臣に話もちかけた。しかし驚いた事には、彼は即刻行動を起こしたのである。3人組の使節団がネパールにやって来て、好意的な報告がなされ

パールにやって来て、好意的な報告がなされた。1975年に第一次のニュージールランド国立公園の顧問が、ナムチュバザールに登ってきて、そしてサガルマタ国立公園のプランが進行したのである。

最初の問題は、シェルパ達自身が国立公園について持っている重大な疑問であった。彼等は彼等の薪の調達を制限されるかも知れない、又彼等のヤクを放牧する牧草地を制限されるかも知れないということを心配した。彼等が他のネパールの国立公園で実際に起こったように、木や野生動物や旅行者に国立公園を譲って、その公園から追い出されるかも知れないという噂さえ流れた。1976年にその地方の村会議員の選挙が行なわれ、村長候補者は全て国立公園に反対した。旧友の一人の古い親友の Khunjo Chumbi はわたしが最初の国立公園の支持者であった事を知っていて、そして彼の政見発表の演説では「ヒラリーは最初にシェルパ達の唇に砂糖を運んでくれた。しかし彼は今では、シェルパ達の目に唐辛子を投げ込もうとしている」と批判した。わたしは彼の心配は妥当なものであると同意しなければならなかった。

最初にニュージールランドの監督官は、公園の本部の建築や、その他の構築物の方に専念していた。しかし徐々に彼等はシェルパ達の福祉と協同組合が同じように重要であるという見解を持つようになった。そしてより一層適切な調和が達成されたのである。ニュージールランドの5ケ年の援助計画が終了した時には、相当に優れた業績が成し遂げられ、いくつかの苗木場がつくられた。シェルパの Mingma Narbu は、ニュージールランドで5ケ年の訓練を経て、その公園の主任監視員に仕立てられ、そしてその仕事をたいへん効果的に果たした。

ニュージールランドが手を引くと共に、その林業の計画の財政的問題をいかに処理したらよいかという、より大きな問題が生じた。しまいに私のヒマラヤントラストが年間15000ドルまで Mingma Narbu が最初に植林の目的に対して十分であると感じた額—寄付金を増額する事に同意した。特に12000フィートを越える

高い所においては、大きな変化は確かに遅々としている事は避けられない事である。しかし改善と変化は疑いもなく起こっているのである。公園の鳥やけもの達は再び急速に増加している。今では多くの苗木場が力強く成長し、そして広範な数の若木が移植されつつある。500匹の山羊は—これは最近になって導入され、そして若草や若芽に相当の被害を与えつつあったが—一ヶ所に集められてその地域から移された。クンプが30年前と同じ様になるには長い時間がかかるであろう。しかし少なくとも進歩はあり、そしてそれは私達が望み得る最良の事である。

最後のところで語られている苗木場が前号で詳しく見た「囲い」である。囲いの評価はともかくとして、このナショナル・パークがつくられる過程でナムチュにあった森林の管理システム（ナワ・システム）が変化したことについておこう。従来ナムチュをはじめとしてクンプーのシェルパ社会にはナワとよばれる村独自の森林管理員が選ばれ、彼等が木の伐採や下刈りなどを管理してきた。ナワには森のナワの他にヤクなどの動物のナワがあり、動物のナワはヤクなどを村から上の放牧地につれていく時期、村に帰す時期を管理し、期間外にヤクが村にいたり放牧地にいたりすると厳しく取り締まり制裁を加えてきた。ところがナショナル・パークができてそこが森を管理するようになるとともに森のナワはナムチュから消えていった。

ところがナワ・システムに限らず村のシステムというのは普通、単独の機能だけを果たしていることは少なく多機能的であるとともに、他のシステムとも結びついており、ナワ・システムを放棄することは他のシステムにも徐々に影響を与えはじめる。そもそも森は外部者からみれば木の生えているところに過ぎないかもしれないが、ナムチュの人々にとっては生活の場そのものである。だからこそ動物のナワも森のナワも独立にあったのではなく、相互に関連するシステムとしてあったのだ。生活の必要からつくられた複合的なシステムが、ナショナルパークの単機能的なシステムに置き換えられることで、森の管理と動物の管理が

引き離され、ナムチェの自然管理は半ば放棄されざるを得なかったのである。

結果として森は救われたように見えるが実はそうでもない。例えば森の中に入ってみると大きな木の根元が半分くらいナタで切られているものがある(写真1)。ナショナルパークのきまりで生の木は切ってはいけないが、枯れたものは燃料用にとってきてもよいことになっている。だから根元を切っておいて、枯れるのを促進しているのだというのだ。もちろんこんなことはナワ・システムが機能していれば起こりようのないことだ。

そんなこともあって、昨年から再びナムチェにナワが復活することになった。そのことをヒラリー卿に聞いてみたことがある。ヒラリー卿はもちろんナワ復活のことは知っていて、「あの当時(ナショナルパーク設立の頃)の状況は切迫していて村のシステムよりパークの管理システムの方がうまく行くと思っていた。だが全体としてみればナワを残しておいた方がよかったかも知れないと思い、昨年、復活させた。あの頃の事情を察してもらいたい」という。

最近のヒラリー卿の心境はかなり複雑のようだ。自分の1960年代からしてきたことが、確かにシェルパの生活改善には役だったようにみえても、結局は予期せぬことながら、それが森林破壊をもたらす方向に働いたのだから。今、地球環境問題といわれている多くのことが、ヒラリー卿のような善意の行為ばかりではなかったとしても、わたしたちの行為の予期せぬ結果として起こっている。そのような事の結果をわたしたちは引き受けていかなければならない。それよりもなによりも、そこに住む人々はその中で暮らしていかなければならないのだ。

4) 水力発電と水道パイプ

そのような事例をもうひとつ見ておこう。ナムチェでは現在、電気は6時から9時までの時間配電、水道はなく水場は村の一番下の一つだけある。一番上のツォルカンまでポンプで揚水しているがそれは軍隊用ということになっている。

たった一つの水場はもちろん水道ではなく、湧き水である。雨の日に見に行ったがそれほど濁らない水がたっぷりと流れ出ている。それでも村人

によれば雨が長く続けば濁ることもあるし、それよりなによりゴミや糞尿やいろいろなものが溶け出して不衛生だと言われているのだそうだ。そんな噂が村の中でひろがっている。さらに冬には水が少なくなることや、それぞれの家へ水を汲んで登って行なねばならないことなど、あれやこれやがあつて村人の水道への思いは大きかったようだ。そんな思いが通じて、オーストリアの援助プロジェクトが今年から上水道を村に引く工事を始めた。

そのプロジェクトはナムチェを起点としてナンパラと呼ばれるチベットとの境をなす峠まで延びる谷の全体をカバーするもので、2000人以上の人がその恩恵にあずかることになるという。来年か再来年にはナムチェでもそれぞれの家に水道の蛇口がつき、あのきつい水運びの労働から子供たちや婦人たちは解放されていることだろう。水場からわたしのテント場であるツォルカンへと登る道の左手の斜面の家の門先の崖のところに1メートル四方ほどの窪みをつくりそのうえに小さな小屋らしきものを造っている家がある。それは戸外の



写真1 根元に切り込みを入れた木

トイレの工事現場であった。回りをみまわすと、なるほど村のそここの家の門先に小さな小屋がある。90年にはあまり見なかったような気がする。水場はちょうど漏斗を半分に切ったような村の一番下に近いところにあるのだから、村の人々がいついたあれやこれやが溶け出して水がきたなくなっているという噂は真実みがある。今は水は急な斜面を10リットルのボトルにいれて運ばれているから、大切にすこしづつ使われているが、これで家々に水道がついたらそこからだされる排水はどうなるのだろうか。

水道がつくと水利用の全体がおおしくかわってしまうことは日本で実証済みだ。日本でも都市を別にすれば家々に水道がつけられるのはそれほど昔のことではなく、おおかた昭和30年代にはいつてからのことだ。琵琶湖のM村に簡易水道がつけられたのもその頃のことだ。それまでM村では大半の家が村の中を流れる小さな川の水を生活用水として利用していた。川は、飲み水、野菜洗い、食器洗い、風呂、洗濯など日常生活だけではなく、舟の通路であったり、屋根からおろされた雪を融かしたり生活のあらゆる場面できわめて多様に利用されてきたのだ。川の水利用では、いやおうな

く川カミの家が使った水を川シモの家で使うという関係におかれてしまう。そこで村の中では水を汚さないための工夫がこらされてきた。M村では家で使った水は川に流さず、それぞれの家の庭につくってあるスイモンとよばれる排水貯溜槽とスイコミとよばれる浸透式の浄化槽に流し込むようになっていた。

その川の水が農薬などで汚れているらしいという噂がひろがり、この村にも簡易水道がつけられることになった。水道が家庭につけられると、最初は飲み水が、それから台所の水、風呂の水が川から水道へとかわっていく。蛇口をひねれば水が使える便利さが水の使用量を増やし、家庭排水量を増やす。そのうち排水はスイコミやスイモンの許容量を越えてあふれだす。そうするうちにひとりふたりと川に排水パイプをだしはじめ、ついに川は排水路と化した。こんな水道化と川の変化は日本中のどこでもみられた物語だ。柳川物語の例をだすまでもなく排水路になった川をもとに戻す努力はたいへんなものだが、川を排水路にするのにはたいした努力はいらない。M村ではいま、汚れてしまった川をなんとか元に戻すために排水規制を始めたと聞いている〔古川；1992〕。



写真2 放置されたパイプラインの蛇口

1960年代のプロジェクトでつくられた水道のパイプラインはナムチェでは今は放棄されている(写真2)。今度の新しいプロジェクトでは水量を確保し易い場所から水が引かれるので、おそらく水が冬になると枯れるという心配はないかも知れないが、今度は上に述べたような問題をはらんでいる。

5) 京都大学ヒマラヤ医学学術調査隊

これまで見てきたようにナムチェは観光化と多くの援助プロジェクトのなかでおおきく変化してきた。観光化と援助プロジェクトはまったく異なるレベルの問題ではなく、同様の問題を内包していることを強調してきた。その意味をもうすこしはっきりさせるために簡単にわたしたちの調査プロジェクトの事例にふれておこう。

わたしたちの調査プロジェクトが最初にナムチェを訪れたのは1989年のことである。最初の年は医師3名、医療技師1名、わたしのような医師以外の研究者4名という構成で日本から医療機器を持ち込んでナムチェで診療と調査を兼ねた診療所を開いた。診療所を開いていたわずか一週間ほどのあいだに112名の住民が診療を兼ねて調査に協力してくれた

また翌90年はチベットで診療・調査を終えた後、同様のスタッフが同じくらの日程でナムチェで診療・調査にあたったが、そのとき診療に訪れたのは401名であった。さらに91年にはナムチェのほかクムジュンでも診療所を開いた。今回91年の診療については瀬戸の稿に詳しいが前年をさらに上回る受診者が訪れた。

3年間の変化として、人数が増えているだけでなく、ルクラからも診療に訪れるというように遠距離を歩いて診療に訪れる人が増えてきたこと、訴えをもってくるのではなく単に健康診断のためだけにやってくる人が増えたことがあげられる。

受診人数の増加は、わたしたちの医師が調査後、日本に帰ってから血液などの検査結果にコメントをつけてナムチェに送りつづけたりする対応もあって、プロジェクトが3年間にかなり広い範囲に知られたこともあるが、同時に住民のあいだに健康観の変化を起こさせてしまった結果であるように思える。それは人数が増えただけではなく、受

診の対応が変化していることにもあらわれている。医師や受診者の話からの推定に過ぎないが、住民は血液検査から外には見えない病気が発見され、その結果から「適切な」治療がほどこされる可能性があることを十分に認識しはじめた。それまでは何等かの症状が起こった場合に村の呪術師やナムチェのヘルスポストを訪れるか、もうすこし症状がひどい場合には、ヒラリー卿が1966年に設立したクンデホスピタルに行くというのが普通のパターンであった。ところがそこに突然、クンデホスピタルにもないような医療機器をたづさえ、一度に3人も4人も医師を含む調査隊がやってきて検診的診察をはじめたのだ。最初の年は半信半疑で訪れた人も、翌年には日本から送られてきた前の年の検査結果を、また今年も確かめてみようという気になって当然だろう。しかもそこに行つてなんらかの病気が発見されれば、薬ももらえるのである。ヘルスポストにしてもクンデホスピタルにしてもそれほどたづぷりと薬があるわけではない。

こうしてその噂はひろがり、住民の間にこれまでとは異なる「健康観」もしくは「病気観」がひろがる。つまり病気は外に現れたときに始まるのではなく、すでに現れる前にはじまっている。だから病気は「発見」されなければならないのだ。これは衛生観とか予防とかという観念とも違う。いままで病気ではなかったものが病気として認識されるのに近い。逆にそうして発見されることで、いままでならほうっておけば治ってしまっていたようなものまで病気になる。さらにはいつも自分のなかに病気を抱えているかもしれないという「健康観」が少しひろがりつつあるようにも思える。

5 援助プロジェクト・調査隊と住民の環境問題

1960年代、日本では過疎問題がおおきく取り上げられていた時期がある。意外に思われるかも知れないが、村に道路が整備されることが過疎化のきっかけとなっていることが多かった。過疎対策事業として道路網の整備が導入され村人たちは道路工事の仕事で日銭を稼ぎつつ、自分の子供たちを高校、大学に出しながらその子供たちが都市に

準備しているといった光景が日本の山村でおおく見受けられた時期であった。

交通の整備は山村を大きく変える。山村に暮らす人におおくの利便をあたえるが、いままで不便さゆえにとめられていた、モノと情報が洪水のように流れ込む。それは量の巨大さよりも時間的な急激さによって村の暮らしをおおしく変えてしまうのだ。ゆっくりと変化することは、村人自身が変化を用意する過程だが、急激で非選択的なモノ、情報の流入は村人とはどこかで切り離された変化である。だから、それへの対応は、伝統の否定というかたちでおこなわれやすい。つまり、それまでの生活のなかでつくられてきたさまざまな工夫のなかに新しいモノ、情報を取りこむのではなく、外から入ってくるモノ、情報ももっている「やりかた」をそのまま受け入れることで対応し、従来の「やりかた」を放棄することになってしまうのだ。それが過疎化として現れるか、別の形で現れるかは地理的条件に負っているとしても、実は過疎化は人が出て行くまえのモノと情報の混乱にはじまっている。

結果が過疎化となって現れるかどうかは別にして、モノ・情報の混乱はこれまでの村の生活体系をおおしく変えてしまう。急激で未知なモノ・情報の流入の中でこれまでに培われた生活の工夫さえもが失われ、そしてその中でどのように対応するのが伝統と切り離されてしまう。流入してくるモノ・情報のままに適応していくことが比較的快適であれば、それは流れとなる。さしあたりの便利さに身を委せながら、すこしだけ先を考えてはいるもののもっと先のことは漫然とこの流れの向こうにある、より便利で豊かに見えるものに託している。

これまで見てきた教育、空港、ナショナルパーク、電化・水道化、医療はナムチェにとってそれぞれが同じ不可逆の近代化を示唆している。ナムチェはいまその不可逆の近代の流れのまっ只中にいるようにみえる。しかし実はこの不可逆の近代化の流れは、それをこれまで十分に享受してきた国や地域では、すでに反省期を迎えている。近代が代償にしてきた自然そのものが問い返されている。76年のナショナル・パーク設立はその前兆だった。ナムチェはその矛盾をも同時に体験しなければならない。

援助プロジェクトはナムチェの人々をさしあたりは便利にし、豊かにしているように見える。だが、その便利さをどのように未来につなげていけばよいのかを示唆していないように思える。その極端な例が今回の医学学術調査であるようにも思える。ここでは二種類のプロジェクトだけを取り上げたが、実はそこを訪れる登山者も観光客もそれを送り込む旅行者も同じ問題を抱えているのだ。

文献

- 鹿野勝彦（1982）高地シェルパの経済と定期市、商店—ナムチェの事例から、リトルワールド年報第5号
- Hillary, Sir E., (1984) Learning about the Problems. Hillary. E ed., "Ecology 2000; The changing face of Earth"
- 古川彰（1991）サガルマタ国立公園の成立と住民の環境問題。ヒマラヤ学誌 第2号
- 古川彰（1992）水のメッセージ（2）。アクアレポート（INAX）12
- Fisher, J.F. (1990) Sherpa: Reflections on Change in Himalayan Nepal, Oxford University Press